

# CALL システムを利用したドイツ語リーディング授業 実例報告

斉藤 渉

## 0. はじめに

CALL ( コンピューター支援外国語学習 ) システムを利用した授業はさまざまな大学のさまざまな言語科目において試みられ、その具体的取り組みの紹介もさまざまな形で行なわれている<sup>1</sup>。筆者は、なるほど CALL システムというものが新しい可能性を提供しうるものではあるが、少なくとも現時点ではなお多くの課題を抱えており、とりわけ「伝統的」な語学教育を受けてきた世代の教師 私もその一部であるが にとって敷居の高い存在であるという印象をもっている。仮に設備的に恵まれていても教師の側で十分にそのポテンシャルを利用しきれない可能性も高く、CALL 授業はあくまで数ある選択肢の一つにすぎないと思う。

CALL 設備の利用を検討する教師にとって最大の問題は、教材選択であろう。既成の教材はたしかによくできているものもあるのだが、自宅のパソコンなどではうまく動作確認できないもの、それどころか CALL 設備のある場所に行かないと実際に動かすことのできないものもある<sup>2</sup>。かといって、CALL 向けでない教材を使用するなら、そもそも設備を利用する意味も薄れるのではないか？ このような危惧は多くの担当者が抱くものと思われる。実際、従来 of 事例報告では、当然のことながら、「CALL ならではの」側面に注目する傾向が強い。それに対して本稿ではむしろ、「CALL でなくとも」可能な授業をあえて CALL を使ってやったらどうなるかという事例を紹介したい。具体的には、CALL を利用したリーディング中心の授業である。

## 1. 授業の概要

以下に紹介するのは、筆者が平成 14 年度 ( 2002 年 ) の前期に行なった、大阪大学基礎工学部の学生を主な履修者とするドイツ語 310A の授業である。ドイツ語科目には初級に相当する 100 番台 ( 1 年次 ) と中級に相当する 300 番台 ( 2 年次 ) があり、基礎工学部生は、

---

<sup>1</sup> 一例として、大阪大学言語文化部 ( 2003 ) に収められた 5 大学の授業担当者による報告、岩根他 ( 2002 ) の大阪大学言語文化部フランス語教室スタッフによる研究プロジェクト紹介を見られたい。また、ドイツ語教育に関しては 1999 年 10 月の日本独文学会秋季研究発表会 ( 徳島大学 ) で、「コンピュータ支援ドイツ語学習 ( CALL ) の現状と展望」と題するシンポジウムが行なわれた。その概要は、堤他 ( 2000 ) に見ることができる。

<sup>2</sup> この点については、平成 14 年度 of 大阪大学総長裁量経費「異文化理解とコミュニケーション中心 of 外国語教授法」の要求が認められ、平成 15 年度からは言語文化部スタッフならば、言語文化部棟の中から、いつでも CALL システムにアクセスできる体制が整えられている。この場を借りて、関係各位にお礼申し上げたい。

1年の前期・後期にそれぞれ週2回、110A・B(主に文法)と120A・B(主に会話)を受講しているが、2年からは週1回となり、原則として前期で310A(読解などの理解能力)、後期で320B(主としてコミュニケーション能力)を履修する<sup>3</sup>。つまり、履修者たちは初級を終えたばかりで、それ以前に複雑なドイツ語の文章を読む機会はほとんどなかった。また、2年生の前期は、ドイツ語を受講するのも週に1回、この授業だけという条件である。最終的な登録者数は47名<sup>4</sup>、受講者の学習意欲はまちまちであるが、全体として見れば、特に低くもなければ高くもないというところであった。

やや内部事情を述べることになるが、CALL教室については前年度のかなり早い段階で教室を確定してしまうため、筆者はひとまずCALL教室をこのクラスで使うことを決めたものの、教材についてはなかなかいい候補が見つからず、かなり長い間決めかねていた。インターネット上の生のドイツ語に触れてもらうというコンセプトだけはあったが、初級を終えたばかりの学生にも読め、なおかつ興味をもってもらえそうなテキストを選定するという作業は正直なところあまり気乗りのするものではなかった<sup>5</sup>。そこで思いついたのが、「では、学生に選んでもらおう」というアイディアである。いかにも怠惰な教師の考えそうなことではあるが、事後的に正当化すると、この選択が結果的には学習者の自主性を活かすというポジティブな効果をもちえたのではないかと思う<sup>6</sup>。

使用したCALL教室は共通教育機構校舎棟A315室で、学生用端末56台の部屋である。各テーブルには、教師用端末から操作できるセンター画面があり、その両側に学生用端末が1台ずつ並んでいるため、学生は教師用端末から送られてくる画面を見ながら、自分の端末で作業をすることができる<sup>7</sup>。この画面切替を簡単にコントロールできるCalabo 2000は、筆者の頻りに利用した唯一のCALL教室らしい設備であった。出席管理や教材配布・回収など豊富な機能をもつSky Menu Proについては、最終日の試験で、問題と解答を一斉配布・回収するのに一度使っただけである。なお、授業のない時間帯は、原則として同じCALL教室が自習用に開放されている。

この授業のもう一つの前提は、大学のサーバー上に置いている筆者のウェブサイトである。これは前年度からすでに運営していたもので、クラスごとの授業連絡、課題の提示などのために利用していた。このクラスで用いた実例として、図1を見られたい。

<sup>3</sup> 科目名末尾のA・Bは、それぞれ前期・後期開講科目の意。なお、平成15年度からのカリキュラム改革により、基礎工学部の新生は原則として1年次のみ必修となり、希望する者だけが選択科目として中級以上を受講する。

<sup>4</sup> うち再履修は6名。2年生のうち、2名の薬学部生を除くとすべて基礎工学部生。

<sup>5</sup> 英語の例ではあるが、インターネット上のニュースソースを利用した授業実践例の詳細な報告として、日野(2003)を参照のこと。ここでも、授業であつかう項目の選択が容易でないこと、また生の素材であるから学生の学力レベルにとってやや高度に過ぎる場合もあることが指摘されている。ドイツ語のように初修外国語の場合、後者の問題点はより切実である。

<sup>6</sup> 学習者の自主性というコンセプトについては、Schlak(2001)を参照。

<sup>7</sup> 2002年度前期までの使用設備については、堀井(2002)に詳しい説明があるので、そちらを参照されたい。なお、2002年度後期からは、サイバーメディアセンター豊中教育棟の完成により、CALL施設も移転し、設備も拡張されている。

図 1： クラスページ ( [http://cobalt.lang.osaka-u.ac.jp/~ssaito/unterricht/2002\\_SS/mi-2-310A.html](http://cobalt.lang.osaka-u.ac.jp/~ssaito/unterricht/2002_SS/mi-2-310A.html) )

### 水曜2限ドイツ語310A

教室: A315 (CALL教室)

対象学部: 基

テキスト: プリントおよびインターネット上のテキスト

⇒ 授業予定表

⇒ 発表日程とテーマ

⇒ シラバス

⇒ 授業の進め方 (注意事項・配点など)

⇒ クラス用掲示板 (時間割からクラスを選択する)

⇒ パスワードの変更 (CALL教室以外の端末からはアクセス不可)

⇒ オンライン辞書 (Windows + Internet Explorer のみ対応)

⇒ ドイツ語正書法の改定について (pdfファイル)

Links: (文字パケする時は、「表示」→「エンコード」→「西ヨーロッパ言語」)

#### Nachrichten:

tagesschau

Yahoo! Schlagzeilen

#### Magazin / Zeitschrift:

Geo Explorer

Die Zeit

Spiegel Online

Bild.de

#### Suchmaschine:

Google Deutsch

Yahoo! Deutschland

The Internet Movie Database

#### 授業予定表

Sitzung	Datum	Anmerkungen
1	17. April	Einführung I
2	24. April	Einführung II, Text + Übersetzung
3	8. Mai	
4	15. Mai	Gruppe 4 読文
5	22. Mai	Gruppe 8 読文
6	29. Mai	Gruppe 9 読文
7	5. Juni	Gruppe 6 読文
8	12. Juni	Gruppe 1 読文
9	19. Juni	Gruppe 7 読文
10	26. Juni	Gruppe 3 読文
11	3. Juli	Gruppe 2 読文
12	10. Juli	Gruppe 5 読文
13	4. September	Gruppe 10 読文
14	11. September	
15	18. September	Prüfung

授業のページに戻る

## 2. 授業運営

### 2-1. 授業の進行

受講者には、第1回授業時に3~5名のグループを組んでもらった。大部分の学生は専門の授業などで互いによく知っているので、編成は学生に任せておけばすぐに決まる。47名の登録なので10のグループができた。なお、第1回の欠席者は、次回以降の授業で適宜人数に余裕のあるところに入ってもらった。

そのほか第1回の授業では、学生がそれぞれのアカウントでログオンしたり、図1にあげたクラスページにアクセスしたりと、以下の授業の基本となる作業をひと通り行なった。受講者の中にはCALL教室の授業は初めての者もいるが、パソコンには普段の授業や日常生活で触れることが多いためあって、特に困難はない。そして、授業予定表と授業の具体的な進め方について説明したプリントを配布し、口頭で説明を加えた(図2にその一部をあげる)。

受講者の各グループがインターネット上でドイツ語の課題文を探してくるというのが、この授業の一番のポイントなのだが、相手はまったく authentic なテキストである。学生たちがまともに読めるだろうか、そもそも碌に内容も理解できない文章をうまく探してくることなどはたしてできるのだろうか、筆者としても不安は残った。具体的には、クラスのページからリンクを貼ったドイツ語検索サイトやニュース・雑誌等のサイトにアクセスしてもらったのだが、学生たちが記事やウェブページを検索するキーワードを決めるために条件を絞っておかなければならない。そこで課したのが、次の3つの条件である：

- 1) 100~300語程度の長さであること
- 2) あらかじめグループごとに選んだ文法事項を含むこと
- 3) あらかじめグループごとに選んだテーマに関連すること

1) についてはほとんど説明するまでもないだろう。ただ、受講者のレベルにもよるが、90分の授業で収めるには、300語だと長すぎるかもしれない(心配しなくてもほとんどの学生は可能なかぎり短い文章を探してきてくれるが)。

2) と 3) は、図2に示したとおりだが、第2回の授業までにグループごとの希望を決めってもらうことにした。2) の文法事項は、1年の学習内容を最低限復習しておかなければ、課題文の選定ができない仕組みになっている。例えば、現在完了であれば、動詞の過去分詞の作り方、接続法の非現実話法であれば、接続法の導き方、その用法などを把握しないかぎり、検索もできない。3) のテーマについても検索のキーワードをドイツ語であげなければならないので、必要な語彙を調べるか、教官に尋ねる必要がある。

こうして探してきた文章の難易度はまちまちだが、それもそれぞれのグループの自主的判断に任せ、自分たちで選んだ課題文には最後まで責任をもってプレゼンテーションを行なってもらう。

図2：第1回授業配布プリント（抜粋）

(1. 発表)

- ・ 毎回、文法項目（Grammatik）とテーマ（Themen）を決めて課題文（100語～300語程度）を1つずつ読んでいきます（文法項目とテーマの候補については裏面を参照）。
- ・ 各グループが1つの課題文を担当し、 Semester中に1回、発表を行います。発表内容は、① 課題文の訳例準備と文法・内容の解説、② 課題文の音読です。
- ・ 課題文は、各グループがインターネット上から選び、遅くとも発表担当の前の授業時まで決定し、クラスに知らせます。
- ・ ① 課題文の訳例は、授業の前々日（月曜日）の24時までにメール（アドレスは下記参照）で提出してもらいます。また、どんな質問を受けても答えられるよう、文法および内容について十分に調べておいてください。
- ・ 発表担当グループは、その回の進行役を務め、訳例および文法・内容などについて説明した後、他のグループや教官からの質問を受け、それに答えなければなりません。このプレゼンテーションが評価の対象となります。また、質問する側も、内容に応じて評価を受けます。
- ・ ② は、グループ全員で準備するのが原則ですが、発表者はグループ内で決めてください。なお、課題文の長さに応じて制限時間を決めます。
- ・ 基本的な評価基準は、1) 制限時間内に読み終わること、2) 発音の正確さ、3) イントネーションの自然さ、4) 明確でスムーズな発話です。

(2. 筆記試験)

- ・ Semester末に、テキストと辞書持ち込み可で独文和訳のテストを行なうので、必ず受験してください。この試験はグループごとではなく、各個人ごとに受験します。

文法事項の候補

現在完了 1  
 現在完了 2  
 助動詞（未来形を含む）  
 接続法 間接話法  
 接続法 非現実話法  
 受動態  
 再帰動詞  
 分離動詞  
 関係代名詞・関係副詞 1  
 関係代名詞・関係副詞 2  
 非人称動詞

テーマの候補

大学生活	Studium
教育	Erziehung / Bildung
人間関係・友達	Beziehung / Freunde
家族	Familie
恋愛	Liebe
結婚	Ehe
環境	Umwelt
コンピュータ	Computer
インターネット	Internet
技術	Technologie
職業	Beruf / Arbeit
政治	Politik
趣味	Hobby
音楽	Musik
映画	Film
本	Buch
アニメ	Anime
余暇	Freizeit
旅行・休暇	Reise / Urlaub

今回は 10 グループだけだったので日程的にはかなり余裕があった(図 1 参照)。2 回目に文法事項とテーマを決めた後、すぐ課題文探しに入ってもらう。各グループは遅くとも発表担当の前の授業までにテキストを決め、クラスに報告しなければならない。もちろん、上の 3 条件を満たしているかどうかは筆者がチェックする。その後、担当グループは、プレゼンテーションに向けて、課題文の全訳準備と、課題文の発音練習に入る。全訳は授業前々日の月曜夜 12 時までには教官あてにメールで送ることとした。

毎回の授業は、発表グループが教官に質問するなどの予備時間が 30 分、続いて 40 分の持ち時間でプレゼンテーションを行ない、最後に筆者がコメントするという形をとった。報告中は、教官が介入しないかわり、時間配分にはそのグループが責任をもつ。10 分程度で課題文を音読し、文法や訳文について説明した後、残り時間で他のグループや教官から質問を受け、回答しなければならないので時間配分はかなりシビアである。プレゼンテーションも教師より手際のいい学生、場慣れしている学生、準備してきたことをとにかく全部話さなければと思い込んでいる学生、マイクを通してほとんど声の聞こえない学生など、人さまざまであった。

このプレゼンテーションの結果により、グループのメンバーは全員同じ評価を受ける。音読 15 点、全訳 15 点、発表 10 点、計 40 点である<sup>8</sup>。また、他のグループによる質問も評価の対象であった。訳文に問題のある箇所を指摘するのだが、質問する側も対案を用意しておく必要がある。これは 5 点満点とした。これによって、発表する側もそれを聴く側も参加意欲をもつだろうというのがこちらの意図であった。

## 2-2. 実例紹介

では実際に、学生たちの探してきた課題文とその全訳の実例を紹介しよう(図 3-1、3-2)。グループ 2 のもので、発表する順番としては 8 番目。受講者も大分この授業方式に慣れたころである。文法事項は関係代名詞・副詞、テーマは趣味であった。課題文はサッカーの 2002 年ワールドカップ関連サイトから取られたもので、語数は本文約 140 語<sup>9</sup>。

ご覧のとおり、準決勝(6月25日(火)ソウル)でドイツが韓国を破ったことについて、G8 でカナダ訪問中のシュレーダー首相が述べたコメントを報じたもので、6月30日(日)に日本で行なわれる決勝戦は直接観戦する予定だと述べられている。原文と訳文を比べるとわかるように、2 箇所に出てくる関係代名詞(第 1 段落の *bei dem* と第 3 段落の *die*)もおおむね正しく訳せている。また、発表の際、報告者は脱落していた訳語などをいくつか口頭で訂正した。

<sup>8</sup> 音読は、課題文の長さに応じて制限時間を設定し、時間内で読み終わることを条件としていた。音読の比重が高いのは、音声面を軽視しないようにという配慮だったが、3 節で述べるように、これはあまり効果がなかった。

<sup>9</sup> 他のグループのものも含めて、すべて図 1 のクラスページからリンクされているので、興味のある方はご覧いただきたい。

図 3-1： 課題文（ドイツ語）実例

⇒ 訳文を見る

## Gruppe 2

**Termin:** 3. Juli

**Grammatik:** Relativpronomen und -adverb

**Thema:** Hobby

Dienstag, 25. Juni 2002, 23:20 Uhr Seoul - Tokio

### Schröder begeistert von WM-Erfolg - In Japan dabei

Ottawa (Reuters) - Bundeskanzler Gerhard Schröder (SPD) hat sich begeistert über den WM-Halbfinalsieg der deutschen Nationalelf geäußert. "Unsere waren heute einfach die besseren", sagte der Kanzler am Dienstag im kanadischen Ottawa unmittelbar nach dem Abpfiff. Er hatte das Spiel, bei dem Deutschland Südkorea mit 1:0 in Seoul besiegte, in seinem Hotel auf einer Großbildleinwand verfolgt. "Wir haben absolut verdient gewonnen."

Zum Finale am Sonntag in Yokohama will der Kanzler nach Japan reisen. "Man sollte die Erwartungen nicht so hoch schrauben", warnte er. Trotzdem hoffe er, dass Deutschland Weltmeister werde. "Wenn es einer schaffen kann, dann diese Mannschaft." Das Team sei während der Fußballweltmeisterschaft zu einer "großen Mannschaft" herangereift.

Das deutsche Team tritt gegen den Sieger der Begegnung Türkei-Brasilien an, die am Mittwoch ausgetragen wird.

Schröder nimmt in Kanada am Gipfeltreffen der sieben führenden Industrieländer und Russlands (G8) teil.

<http://fifaworldcup.yahoo.com/de/020625/2/az9.html>

図 3-2： 課題文全訳 実例

⇒ 原文を見る

## Gruppe 2 訳文

### その時、シュレイダーさん日本でのW杯の結果に大感激

オタワ(ロイター)＝ 独首相のグハルド・シュレイダー(ドイツ社会民主党)はドイツ代表のW杯準決勝について感激して意見を述べた。"我々のチームは本日全くもってすばらしかった。"と、シュレイダーは火曜カナダのオタワにて終了のホイッスルが吹かれてすぐにこのように述べた。シュレイダーはドイツが韓国を1-0で破ったゲームをホテルの大きなスクリーンで見守っていた。"我々は全くもって価値ある勝利を手にした。"

日曜日に横浜で行われる決勝の為にシュレイダーは日本を訪れたいと思っている。"我々はそんなに期待感を高めるべきではない。"と彼は警告した。が、それにもかかわらず、ドイツがチャンピオンになることをのぞんでいる。"もし誰かがやるとするならば、それはこのチームだろう"このチームはW杯のあいだに、強いチームへと進んだのだ。

ドイツチームは水曜に決勝のつけられる、ブラジルとトルコの勝者に挑む。

シュレイダーはカナダで先進七ヶ国とロシアによるサミットに参加した。

<http://fifaworldcup.yahoo.com/de/020625/2/az9.html>

全般的に訳がうまく行っている一因として、発表者がワールドカップ関連の報道を自分の興味から追っていたことがあげられるだろう。内容理解のために、関連情報を日本語や英語のサイトなどで調べるよう、筆者も勧めていた（その割には、シュレーダー首相のファーストネームが「ゲハート」になっていたりもするのだが）。

もちろん、もっと難しい課題文の場合、これほどうまくは訳せていないケースも多かったが、2年目前期でインターネット上の文章など読めるのだろうかという心配は杞憂であった。たしかに問題はあるが、授業としては十分成立する。そのことを示す意味で、報告者とのグループとの質疑応答の様子を一部紹介しよう。

最初のグループは、見出しの訳「その時、シュレーダーさん日本でのW杯の結果に大感激」について質問した。第1段落では準決勝戦がソウルであったと述べており、「日本でのW杯の結果」という訳はおかしいのではないかという疑問である。報告者側もこの指摘に納得した。それを受けて質問者側は、記者が日本にいるという意味ではないか、という解釈を出した。記事の発信地がTokioとされているため、このような解釈が出てきたのだろうが、もちろんこの箇所理解としては正しくない。

この質問を受けて3番目のグループは、「その時」がdabeiの訳語であることを確認した上で、dabeisein「参加する」の意味ではないかと指摘した。つまり、In Japan dabeiの箇所はシュレーダー首相が日本で観戦するという意味ではないかという正しい解釈である。これに対して、報告者側は「日本で行なわれているワールドカップの結果に感激した」という解釈を繰り返した。

以上は一例であるが、質疑応答の中でこのように文法や訳文についてかなり詳細なやりとりがなされる。教師は介入しないため、議論が非本質的なところへずれていくことも少なくないが、学生が自分たちで考える時間をもつという意味で、それはそれでよい。おそらく発表グループの全訳を最初から教師が修正すれば、5分もかからずに終わってしまう。リーディングの授業としてどちらがより望ましいかは判断の分かれるところだと思う。だが、教師の側で説明してしまえば、文法や語句について学生たちがああでもないこうでもない論じる光景は見られなくなってしまうだろう。

### 3. 問題点と今後の課題

#### 3-1. 積極的評価点

今回の授業方法について肯定的に評価できる点は、次の4点があげられると思う。

第一に、学習者の自主性を促す効果があった点である。インターネット上のリソースから一定の条件に見合うようなドイツ語のテキストを探し出すという課題は、CALL設備が授業中になれば不可能というわけではない（大学内のさまざまな端末や家庭のパソコンが前提となるが）。課題文についてもプリントアウトしたものをコピーすれば、通常の教室でもほぼ同様のことは可能である。しかし、CALL教室で授業すれば、非常に容易である



ことは言うまでもない。さらに、課題文に対して最後まで責任をもって、発音練習、語彙や文法のチェック、全訳作成を行なうという部分でも、学習者の自主性が要求される。評価という動機づけがあつてのことではあるが、どのグループも自分の発表に関してはよく準備してきた。グループ単位で作業をしたこともプラス要因として働いただろう。また、プレゼンテーションという形で「教えることを通じて学ぶ」機会が得られることも重要な点として評価できるだろう。

第二に、教材の自由度というメリットがあげられる。1 節で述べたように、CALL 授業を本格的に行なう場合、特定のソフトウェアに頼らざるをえないことが多い。自前でマルチメディア教材を作ることなどは困難だし、可能だとしても手間がかかりすぎる。本稿で紹介した方法なら、ことリーディングに関しては、この問題が解消する。最初に与える条件の設定を変えれば、特定のテーマに絞ったテキスト選択なども可能になるだろう。

第三に、コピーした資料を作らなくてよいという点である。基本的には、同じことを CALL 設備のない教室で行なうことも不可能ではないが、ドイツ語原文と日本語全訳を毎回人数分用意するのはかなり手間のかかることであるし、紙資源の無駄にもなる。もっとも、受講者の多くは課題文や全訳をプリントアウトしていたので、紙の使用量についてはさほどの効果はないかもしれない。

第四に、このようにして蓄積された課題文や訳文をウェブ上に公開しておけば、長期的に利用可能になる点があげられる<sup>10</sup>。訳文の間違いをチェックしていくと、そこには一定の傾向が見られる。例えば、2-2 でとりあげた事例の場合、ニュース記事のヘッドラインに特徴的な省略文体が誤訳の原因となっていた。語句を適当に補って訳すとすれば、  
„Schröder [ist] begeistert von WM-Erfolg – In Japan [wird er auch] dabei [sein]“ 『シュレーダー首相 ワールドカップの成果に満足 – 日本でも観戦』のようになるだろうが、省略文体は他のグループでも誤訳の原因となっている。多くのケースは、初級文法で十分に取り扱われていない事項に関係するが、こうした傾向を分析すれば、教師の側でもより効果的に学習を支援することができるだろう。

### 3-2. 問題点

問題点も少なくはない。ここでは4点だけあげよう。

第一の問題は、課題文や訳文を表示するためのウェブサイトである。筆者の場合、大学のサーバー上で運営しているが、それが難しいというケースもあろう。ただ今日では無料スペースなどいろいろあるので、さほど大きな問題にはならないと思われる。

では、技術的な面はどうか？ 筆者は通常、市販のホームページ編集用ソフトなどを使わず、Windows 機に入っている「メモ帳」のようなテキストエディターで直接 HTML ソースを書いている。慣れの問題もあるが、編集ソフトによっては、ドイツ語混在の多言語環境

---

<sup>10</sup> これは、授業担当者だけではなく、他の教官や、次年度以降の学生についても言える。ただしその際、著作権の問題に考慮しなければならないが、ここではこの点には触れないでおく。

だと文字バケを起こすこともあるので、かえって煩雑なこともある。当然、HTML についてごく基本的な知識をもたなければならないが、市販のレファレンスが 1 冊あれば、特に勉強する必要はないだろう<sup>11</sup>。もしデザインを考えるのが面倒であれば、筆者のページをそのままコピーして使っていただいてもかまわない。HTML の編集さえできれば、後は ffftp のようなフリーウェア<sup>12</sup>で自分の使っているサーバーにファイルを転送するだけである。

ドイツ語の入ったページを作る場合、ウムラウトやエスツェットの処理が問題になる。いろいろな方法が考えられるが、筆者の場合、まず使用するドイツ語文をコピーし、Word などの文書作成ソフト（ただし検索・置換機能のあるもの）に貼り付ける。さらに、表 1 の方法にしたがって、ドイツ語特殊文字を一括して置換する。大文字と小文字のウムラウトにエスツェットで計 7 回の手順だが、大した手間ではない<sup>13</sup>。

表 1：ドイツ語特殊文字の置換方法

Ä: &Auml;	Ö: &Ouml;	Ü: &Uuml;
ä: &auml;	ö: &ouml;	ü: &uuml;
ß: &szlig;		

例: Übermaß      &Uuml;berma&szlig;

置換した状態で HTML ソースに貼り付け直し、そのファイルをブラウザで開けば、ドイツ語特殊文字も表示される（ただし、ブラウザが多国語対応のもの）。もしこれも難しいということであれば、ウェブ関連をティーチングアシスタント（TA）に依頼することも可能であろう<sup>14</sup>。

第二の問題点としてあげられるのが、授業準備である。ウェブ上から生の素材を探してくる以上、教官の知らない専門用語や事典類にさえないような固有名詞も出てくるし、必ずしも規範的なドイツ語で文法規則どおりに書かれているとも限らない。ここに紹介したようなスケジュールで授業を行なう場合には、それほど時間的な余裕がないこともある。だが、これは中級以上であれば、どのような教材でも多かれ少なかれ言えることだろう。

第三の問題として、評価法をあげなければならない。報告者だけが調べるのではなく、

<sup>11</sup> 参考までに、筆者が使用している HTML 用レファレンスは、ComTECH (2000) と大藤・半場 (2000) である。筆者のようにごく限られたことしかしないユーザーの場合、これ以上の知識が必要になることはまったくない。

<sup>12</sup> 曾田純氏による。次のページでダウンロード可能。http://www2.biglobe.ne.jp/~sota/ffftp.html（2003 年 3 月末現在）

<sup>13</sup> 原文については、単に該当ページにリンクを貼るだけでは駄目なのかと思われる方もいるだろう。むろん、リンクだけでもかまわないのだが、授業の時点でリンク切れになった場合、あるいは、当該のサーバーがダウンしている場合のことも考えて、原文も別に残しておくほうがよい。

<sup>14</sup> いずれにしても、原文と訳文には文番号を付けるのが望ましい。授業中には「第 3 段落の最後の文」という形で文を同定していたが、煩雑である。

発表を聴く側にも積極的参加を促すため、質問内容も評価の対象としたが、どのような質問がよいのか、明確な基準を示すことはなかなか難しい。そのほか、音声面が軽視されないよう、テキストの音読も評価対象としたが、現在の方式だと発表をする一人の学生はそれなりに練習するものの、それ以外の学生は相変わらず単語を英語読みしているなど、十分な効果をあげられなかった。この点も再考の余地がある。また、今回の方式では教官のみが評価したが、学生同士で他のグループや自分のグループを評価するという可能性も考えられるだろう。

第四の問題は、プレゼンテーション技能の向上である。せっかくこれだけ時間をかけて準備するのだから、わかりやすく効果的に発表する技術を身につけてもらうよう、教師の側でも何らかの工夫をしたほうがよい。言うまでもなくこれはドイツ語以外にも応用できる技能である。プレゼンテーションの様子をビデオ撮影して、それを授業時間のどこかで見てもらうという方法も効果的かもしれない<sup>15</sup>。

以上、まだまだ問題や改善点もあるが、このようなリーディング授業なら、CALL 設備を利用するのに特別の準備もいらぬし、学習者の自主性を活かした学習形態を工夫していくことができる。そして何より、インターネット上のリソースを利用することによって、生きた語学素材を授業に取り入れることができる点に、この方式の大きな可能性と魅力があると言えよう。

---

<sup>15</sup> 岩居 (2002) にコミュニケーション主体の授業での実践例が報告されているが、そのノウハウは本稿で紹介した形態の授業にも応用可能だと思われる。

## 資料

- 岩居弘樹 (2002): ビデオを利用したドイツ語授業 コミュニケーション訓練とビデオ撮影 , in: Schlak 他: 異文化理解教育としての外国語授業 . 大阪大学言語文化部 / 大阪大学大学院言語文化研究科 2002 [ 言語文化共同研究プロジェクト 2001 ] 15-33.
- 岩根久他 (2002): 異言語・異文化教育におけるマルチメディア教育の可能性 フランス語教育の現場から . 大阪大学言語文化部 / 大阪大学大学院言語文化研究科 2002 [ 言語文化共同研究プロジェクト 2001 ]
- 大阪大学言語文化部 (2003): 「外国語教育における CALL 授業の位置づけ」報告書 . 平成 14 年度国立 7 大学外国語教育連絡会合同シンポジウム . [ 大阪大学言語文化部平成 14 年度ファカルティ・ディヴェロプメント ]
- 大藤幹・半場方人 (2001): 詳解 HTML & CSS & JavaScript 辞典 with CD-ROM . 秀和システム .
- ComTECH (2000): ホームページテクニク辞典 カラー改訂版 . 秀和システム .
- 境一三他 (2000): コンピュータ支援ドイツ語学習 (CALL) の現状と展望 [ 1999 年度秋季研究発表会シンポジウム報告 ] , in: ドイツ文学 [ 日本独文学会 ] 104 (2000), 224-228.
- Schlak, Torsten (2001): Lernerautonomie und Grammatikarbeit, in: Schlak 他: 「文化の解読」 / ドイツ語教育の諸相 . 大阪大学言語文化部 / 大阪大学大学院言語文化研究科 2001 [ 言語文化共同研究プロジェクト 2000 ] 53-65.
- 日野信行 (2003): 英語教育における NIE ( Newspaper in Education ) の新たな実践 インターネットと TV ニュースを併用して, in: 大阪大学言語文化部 (2003), 5-12.
- 堀井祐介 (2002): 大阪大学 CALL システムについて, in: 岩根他 (2002), 9-14.